

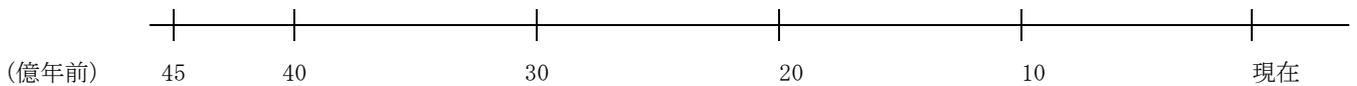
私たちはどこから来たか？

地球人類の一員として当然知るべき知識

- 1) 私たちの銀河（天の川銀河）は2.5億年周期で回転する直径8万光年の巨大な星の集団である。銀河はほかにも無数にあり、銀河どうしは秒速数百kmで遠ざかっている。遠ざかる速度は距離に比例する（ハッブル定数）。私たちの太陽系は、私たちの銀河の中心から25,000～28,000光年ほどの位置にあり（中心からかなり遠い）、約220km/sの速度で銀河系内を周回、約2億2600万年で銀河系内を1公転する。
- 2) 宇宙と私たちの太陽系、地球、地球上の生命はいつごろできたか。 ESA=欧州宇宙機関

(A) 宇宙の始まり（「ビッグバン」とよばれる大爆発）	約 137億年前	138億年前説も登場(ESA2013)
(B) 私たちの太陽系と太陽系第三惑星（＝地球）の誕生	約 46億年前	
(C) 最初の生命の誕生	約 38億年前	
(D) 最初の脊椎動物（魚類）の誕生	約 5億年前	
(E) 恐竜の絶滅	約 6550万年前	
(F) 最も古い人類の誕生（ラムダス猿人説による）	約 450万年前	
(G) 現在の人類の直接の祖先（新人）の誕生	約 20万年前	（約13万年前とする説もあり）

上の (B)～(G) は下のどのあたりか？ 印をつけなさい。 右に行くほど新しい。 →未来



地球の全歴史を1年間とすると、ラムダス猿人（約450万年前の猿人）の出現は、**12月31日15時26分ごろ**である。

これはまれに出題されることがある。

- 3) 上の時間軸の右方向は、永遠に続くのだろうか？約54億年後、水素核融合反応で燃えている私たちの太陽は燃料切れになって大きくふくらみ、わが地球をも飲み込んだあと収縮し（近年そうはならないという説も登場）、ブラックホールにはならず、電波やX線しか出さない白っぽい色の死んだ星になる。これが地球文明のいわば「自然死」であり、その時、人類が生存していれば、高度な宇宙航行技術を駆使して、地球と似た環境の惑星を求めて星間移住を試みるであろう。約6550万年前、直径約10kmの隕石の激突で起きた気候の大変動で恐竜は滅亡したとされる。衝突物がもっと大型だったら生命はおろか地球も存在できない。これは地球文明のいわば「事故死」である。人類は、地球衝突コースをとる巨大隕石や小惑星にロボットと核弾頭を送り込み、未然に粉碎するプランを真剣に研究し始めた。しかし、巨大隕石や小惑星の激突を防いだとしても、【1: 破壊】、【2: 枯渇】、【3: 戦争】、原発重大事故等による核汚染、対応不能の伝染病などで、太陽が燃え尽きる以前でも人類が絶滅することはありうる。それらの原因の多くは人類の未熟さにある。
- 4) 温度、気圧、重力、大気成分、液体状の水の存在など環境が地球とよく似た惑星は私たちの銀河系内だけでも数千～数億あり、それらの惑星では生命の誕生、進化の可能性がある。それが高度な知的生命に進化を遂げた場合、「エイリアン」（異星人）と呼ぶことがある。むしろ私たち地球人類もエイリアンの一種類にすぎないと考えることもできる。

アーサー・C・クラーク 「2001年宇宙の旅」（原作本の方。映画と原作はかなり異なる）では地球に来たエイリアンが私たちの先祖に知性を与えたことになっている。

本書は、私たちの先祖は太陽系第三惑星に生まれ、独自に知的生命に進化したという前提で記述する。

補足

《エイリアンは存在する可能性が高いが地球には来ていない》というのが学者たちの多数説的見解。その根拠は①距離が遠すぎ（光の速さで数万年※1）、しかも②惑星には寿命があり私たちと同じ時間を共有しているとは限らない、等。その前提には、SF映画やアニメの世界ではとくに「実用化」されている「ワープ航行」（参考：アニメ・実写「宇宙戦艦ヤマト」）や時間航行装置（タイムマシン 参考：映画「タイムライン」、アニメ「ドラえもん」）は、理論物理学的には可能だという説もあるが、莫大なエネルギーを必要とする事などから、実現はきわめて難しいとされている。念のため注意しておくが、今のところ地球外の知的生命体の存在は学術的には証明されていない。

※1 2012年、くじら座の「タウ星」の5つの惑星の1つは太陽（タウ星）から程よい距離で液体の水が存在するという研究が発表された。地球からの距離はわずか12光年。それにしても光速で12年だからとんでもなく遠い（地球・太陽間の距離の76万倍）ことに変わりはない。2016年、太陽系から最も近い恒星プロキシマ・ケンタウリの周りで、地球ほどの大きさの惑星プロキシマbが発見された。

「UFO」（アメリカの軍事用語：未確認飛行物体）としか言いようのない飛行物体について

その出現については、多くの専門家が事実であると認めている。ただし、これを地球外起源のものだと断定する根拠はどこにもない。「ミステリーサークル」や巨石遺構の建造方法、「オーパーツ」をはじめとする多種多様な未解明の問題を、ただちに地球外的なものに結びつけるのは早計であるというのが一般的な見方である。

人類の出現

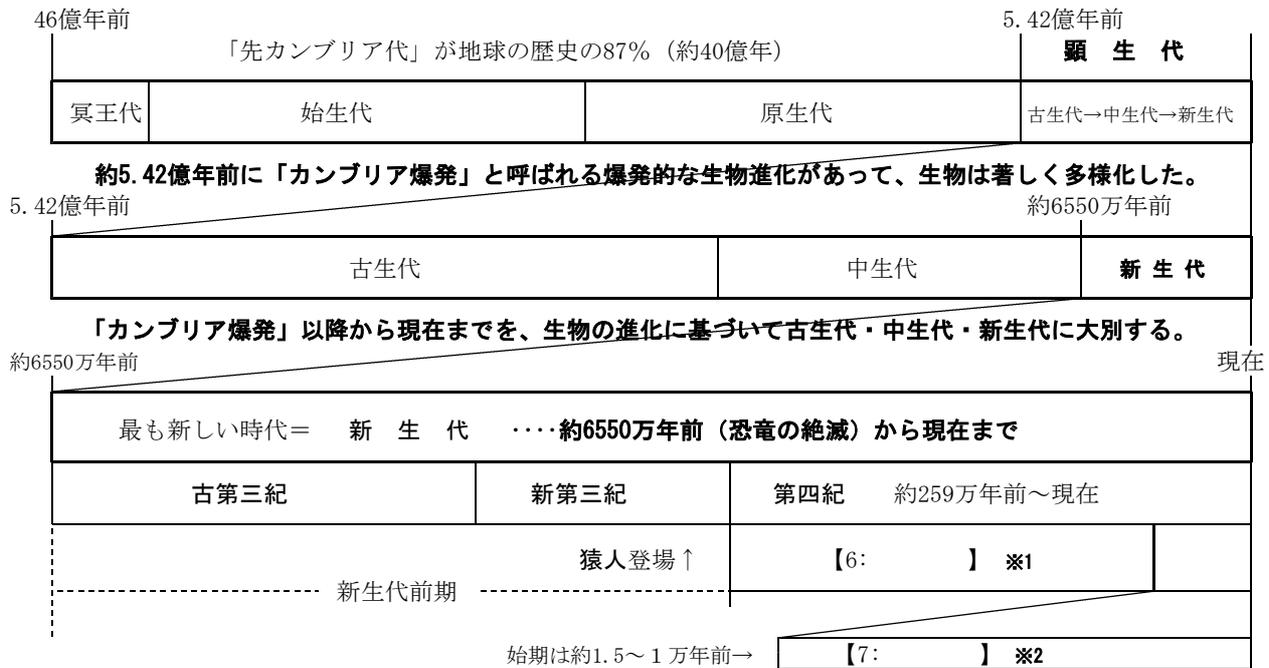
人類の誕生から、文字を発明して歴史を記録に残すようになるまでの、文字による歴史の記録が存在しない時代を【4: 】という。人類史の99%以上はこの先史時代である。人類は、猿人・原人・旧人・新人（現生人類）の順に進化した。この分類は既に人類史学会では使っていないが世界史では使うし入試でも出題される。最古の人類の出現時期については、教科書でさえも説が異なる。「人類は、450万年以上前、地質年代で新生代前期にアフリカ大陸に現れた（帝国書院）」、「【5: 】を特徴とする人類が誕生したのは、今から700万年前のアフリカにおいてである（山川出版社）」。

人類の出現時期は地質年代の用語で表現される。

地質年代 冥王代→始生代→原生代→古生代→中生代→新生代 これが地球の地質年代のすべて。

地質年代に対して旧石器時代、中石器時代、新石器時代などは考古学で言う年代である。

地質年代で語る地球と人類の歩み



猿人は新生代前期、新第三紀の最末期。原人、旧人、新人は新生代第四期更新世に出現した。

第四紀の始期 (従って更新世の始期) は約170万年前から約259万年前に2009年に改訂された。保護者様の青年期とは学説が変わった。

※1 【6: 】 (洪積世) は4回の氷期 (氷河期) と3回の間氷期があり、俗に氷河時代とも呼ばれ、**考古学的年代の旧石器時代**にほぼ相当する (厳密には旧石器時代はもっと遡る)。更新世には原人、旧人、新人が活動した。猿人は更に古い新第三紀期に活動した。

参考: 「第四間氷期」 (安部公房) という作品がある。これは文学的表現であり、第5氷期は未到来なので、現代を「第四間氷期」とは呼ばない。

※2 【7: 】 (沖積世) は**後氷期**とも言い、**第4氷期が終わり温暖化した時代**。

ここから人類の生存をかけた生産経済への移行が始まる。

☆先史時代の出題は少ないが、出題された場合、**更新世、完新世 (=後氷期) は頻出**。それらが**新生代第四紀 (新生代後期)**であることもまれに出題される。これら以外の地質学的年代用語は覚えなくてよい。洪積世、沖積世はもちろん、後氷期という用語も現代の地質学では既に使っていない。

「キネズミさんからヒトが出た」

通説 = 最も信頼されている学説

1) 19世紀の半ば過ぎ、ダーウィンは「【8: 】」を出版し、「すべての生物は低級なものから進化した」という【9: 】の考え方を表明した。今日では通説となっているが、発表直後は大論争となった。特にキリスト教の指導者たちが猛烈に反発した。進化論が正しければ、それは当然ヒトにもあてはまるので、『旧約聖書』の教えに反するからだ。

資料 旧約聖書 創世記 1 創造 イ - 祭司資料の創造記 (1ノ1 - 2ノ4前半) 岩波文庫 青801-1

・・・そこで神が言われた、「われわれは人をわれわれの像の通り、われわれに似るように造ろう。彼らに海の魚と、天の鳥と、家畜と、すべての地の獣と、すべての地のの上に這うものとを支配させよう」と。そこで神は人を御自分の像の通りに創造された。神の像の通りに彼を創造し、男と女に彼らを創造された。

進化論は「過去に生きていた生物」についての研究 (古生物学) から始まったが、当時はそれを裏付けるだけの学術的証明が充分にはできなかった。また、進化のしくみはダーウィンの適者生存の法則だけでは全てを説明することはできない。それは、研究が進んだ現在でも完全には解明されていない。

2) ダーウィンは1871年の著書の中で、「将来、必ずヒトとサルを結ぶミッシングリンク ※3 が発見されるに違いない」と述べている。実際に、既に1856年にネアンデルタール人 (旧人)、1891～94年にジャワ原人 (直立猿人)、1907年にハイデルベルク人 (原人、旧人説も) が発掘された。『種の起源』の出版は1859年である。 ※3 この用語は古生物学の一般的用語

サルの先祖・・・ (中間型化石群)・・・現在のサル

ヒトとサルの共通の先祖

今日の「キネズミ」に似た小動物

ヒトの先祖・・・ (中間型化石群)・・・現在のヒト

(ツパイ目、熱帯雨林の樹上に棲む)

↑ 当時は未発見のミッシングリンク

童謡「ゆりかごの歌」 (詞 北原白秋) の歌詞に「きねずみ」が出てくるが、これは詩的表現で、どうやら「リス」を意味するようである。

3) 最古の人類は、常時【10: 】を行う点で**類人猿** ※4 と区別され、【11: 】とよばれる。化石の分析から常時直立二足歩行していたと断定できる生物は人類なのだ。

※4 チンパンジー・ゴリラ・オランウータン・手長猿など人類に近い霊長類

頭蓋骨を裏返すと底部に丸い穴 (大後頭孔) がある。これが【12: 】との接合部で生存中は延髄が通る。これが頭部の重心の真下に近いところであれば、直立した背骨 (脊椎) の上に頭蓋骨が乗っていたから、その生物は、『直立二足歩行していた』と強く推定できる。更に下肢骨格や足跡が発掘されれば確定する。

4) 猿人の直接の先祖は、樹上生活をするうちに回旋できる肩と背骨の延長方向まで伸ばせる下肢を獲得し、直立二足歩行の骨格的準備ができていった。知能の高さから興味関心を持って地上に降りたのではなく、比較的小さな脳しか持たなかった彼らは、気候の変動で密林が後退する中、食料を獲得して生きのびるためやむなく地上に降り立った。初期の人類は常時直立二足歩行することで、歩行動作から解放された前肢 (=手) を使い、**道具**を作り、労働する過程で更に進化して現在に至ったというのが通説である。すなわち、労働が人間を造ったと考えられる。

新人

新人＝現生人類＝本書を書いた人類 　ただし一説によれば新人は旧人より古いという。

- 1) 旧人の生息域がヨーロッパを中心に西アジア、北アフリカという比較的狭い範囲に限られていたのに対し、【10: 現生人類、学名はホモ・サピエンス・サピエンス】は故郷のアフリカ大陸から生息域を次第に広げ、中近東を経由してヨーロッパやアジアに広まったばかりか、アフリカとユーラシアのほとんど全域に広まり、さらに当時地つづきであったベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸にも移住し、1万年前に南アメリカ南端にまで到達した。また、オセアニアには東南アジア方面から船を操って進出した。約4万年前に旧人を押し退けて太陽系第三惑星の主要な知的生物となった。以上はほぼ通説である。現生人類が旧人を殺害し絶滅させたとする説もある。また、新人はアフリカ大陸でむしろ旧人より早く成立して前掲のような経過をたどったという新しい学説もあるが今のところ多数説ではない。新人の起源は教科書では約20万年前（約13万年前とする教科書もある）としているが、新人は旧人より古いという説が真実なら後掲の表の旧人・新人の時代表記は誤っている。また、旧人より新人の方が古いのでは、旧人、新人という用語自体が意味不明となるだろう。
- 2) 新人の代表は西南ヨーロッパの【11: 現生人類】や中国の竜骨山の山頂に近い洞窟※3で発掘された【12: 現生人類】、北西イタリアで発見されたグリマルディ人である。彼らは、剥片石器（既に旧人が使用）を更に発達させ、【13: 現生人類】（ブレード）を使用した。後期旧石器時代であり、約1万数千年前からは狩猟・戦闘に弓矢が使用された。鎌は細石器。
※3 麓に近い洞窟からは北京原人が出土した。

猿人・原人・旧人・新人

○あり ×なし △不十分

この4分類は人類学会では既に使われていない。しかし、世界史Bでは大学入試に出題される。

大きな分類	猿人	原人	旧人	新人	現生人類
化石人類	アウストラロピテクス属 南アフリカ	ジャワ原人 インドネシア 【14: 現生人類】竜骨山 ハイデルベルク人(旧人?)	ネアンデルタール人 独	【15: 現生人類】人 南仏 周口店上洞人 中国 竜骨山 グリマルディ人 北西イタリア 浜北人 静岡県	
脳の大きさ	380～750 ml	800～1200 ml	1150～1700 ml 平均1450ml	1000～2000 ml	現代人は平均 1350ml
火の使用	×	○	○	○	
言語の使用	×	○? 起源は近年不明とされる	○	○	
埋葬の習慣	×	×	△	○	
芸術 その他	×	×	道具や身体に彩色 毛皮の衣服	ビーナス（女性裸像）、洞窟壁画の作者 洞穴とも言う	
およその出現年代	約450万年前	約170万年前 ※4 ジャワ原人は70万年前、 北京原人は50万年前。	約60万年前 この人類は私たちと つながっていない!	約20万年前（約13万年前説も有り） 約4万年前に旧人にとってかわった。	約9000年前
時代の呼称	旧石器時代				新石器時代
	前期旧石器時代		中期旧石器時代	後期旧石器時代	
				中石器時代 ※5	
石器の区別	打製石器				磨製石器
石器の例	石核石器		【16: 現生人類】		
	礫石器	握斧（ハンドアックス） 握り方を確認せよ。	剥片石器の製法で 製作した握斧 (刃の部分が左右対称)	石刃（ブレード） 細石器	磨製石斧
その他				【17: 現生人類】 ※6 釣針、針、槍、銛	
食料の確保	獲得経済 狩猟・漁労・採集				生産経済 農耕・牧畜
				マンモス狩も行う	

- ※4 ホモ＝ハビリス（多数説では猿人・原人の中間にあるとされる）を原人とする立場からは約240万年前となる。
- ※5 約1万年前、第四氷期も終わり完新世に入り、打製石器から磨製石器への移行期で両者が併用された時代を中石器時代という。[石器から鉄器への移行期]ではない。小型の剥片石器の一種である【18: 現生人類】の使用を指標とする。これを巧みに用いて鎌や槍の穂先、鎌などを製作した。細石器を並べて作られる槍の穂先は非常に特徴的。その直前の段階では高度に加工された単一のやや大きな剥片石器である尖頭器 O8W が穂先に使用されたが、その期間は短かった（日本史では比較的長い）。尖頭器はアニメの「原始人」がよく持っているが、紐で簡単に固定する表現はリアルではない。
- O8W とは2008年に早稲田大学で出題されたという意味（以下同様）。K=慶応、J=上智、G=学習院、M=明治、A=青山、Ch=中央、H=法政 等
- 石器の先を砂などで磨いて刃をつける【19: 現生人類】が作り出され、徐々に普及して打製石器と併用され、作業の効率が上がった。まだ栽培はしないが、野生の麦類を刈り取り、食糧とする場合もあった。
- ※6 遅くとも後期旧石器時代には、動物の骨や角で銛、槍、釣り針、縫い針なども製作した。これを骨角器という。このため 狩猟・漁労・採集の技術がいっそう高度化した。骨格器ではないぞ

旧石器時代の芸術

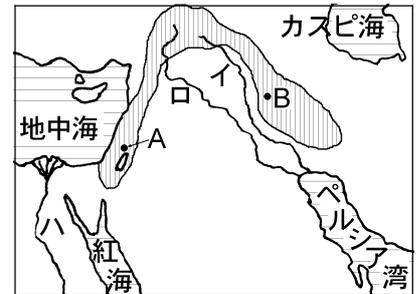
狩りの成功を祈る呪術だと言われている。

新人は【20: 現生人類】を残した。旧人が描いた部分もあるという説もある。(1)(2)とも現在は保存のため閉鎖中。

- 1) スペインの【21: 現生人類】洞窟の壁画 約270mにわたって、赤、黒、藤色などの顔料で迫力いっぱいバイソン、シカ、ウマ、イノシシなどの動物が少なくとも930の壁画に表現され、最大のものは長さが2.2mもある。旧石器時代末期（1万3000年前頃）の絵。1879年、第一発見者は地元の貴族で弁護士のサウストゥオラ子爵の当時5歳の娘マリアだった。20年以上たつて認められた。
- 2) フランスの【22: 現生人類】洞窟の壁画 1940年、迷子になった犬を探していた4人の少年が発見。本物のすぐ傍に人工のレプリカ洞窟「ラスコー2」を建造、公開している。
- 3) アルデシュ川の【23: 現生人類】洞窟の壁画 3万年以上前に描かれたもので、現在のところ最古の洞窟壁画である。高画質のDVDを販売するという方法で内部を公開している。

農耕・牧畜のはじまり（食料生産革命） 獲得経済から生産経済へ

- 1) 約1万年前、【1: 】に入って地球の温暖化、乾燥化は進行した。海面が最も低下した時と比べ約130mも上昇したと言われている。特に温暖化、乾燥化が進んだ【2: 】では人類最初の生業であった狩猟・採集活動が破綻し、そこに住む人類は存亡の危機に直面した。寒冷な環境に適応した大型獣が北方に去り、代わって繁殖した中型・小型の動物は、皆敏捷で群生しないものも多く、狩猟は難しさを増した。降雨が減少し植物性食物の採集も行き詰まった。
- 2) BC8000年ごろ（『詳説世界史』は約9000年前と記述）の西アジアの【3: 】周辺の低湿地で、狩猟・採集のかたわら、安定した食糧確保の必要に迫られて、コムギ、オオムギの栽培が始まった。そこは自然条件に恵まれ野生のコムギ、オオムギが当時自生した地域（下図の縦線部分、厳密にはこれは「肥沃な三日月地帯」とは呼ばない）の一角に位置する。やや遅れてヤギ、羊、豚、牛の飼育が始まった。石斧（中石器時代からあった）などの【4: 】石器が使われ、西アジアは人類史上最も早く考古学上の【5: 】に突入した。新石器時代とは磨製石器が使用された時代である。
- 3) 前掲2)の人類最古の農村遺跡は右図のA = 【6: 】である。



世界史Bの学習で都市、遺跡、戦場などが登場したら、呼称、時代、意義とともに所在地の現代の国名も記憶せよ。（以下すべて同様）

イェリコはヨルダン川河口の低湿地にある湧き水による初期農村。肥料を施さない**略奪農法**だった。もちろん灌漑も行わない。

イェリコは、英語で Jericho ジェリコ。『旧約聖書』ヨシュア記に登場する。合唱曲「ジェリコの戦い」のジェリコである。イェリコは、ガザ地区、パレスチナ暫定自治行政府と並んで20世紀末のパレスチナ問題の用語として登場するが、先史時代の農村遺跡としても記憶すべきであろう。

- 4) ヨルダン川流域の低湿地で始まった冬型の麦類の栽培（農耕）と動物の飼育（牧畜）は、メソポタミア北部丘陵地帯に広まった。ここも野生のコムギ、オオムギが当時自生した地域（上図の縦線部分）の一角に位置する。この段階の代表的な農村遺跡は上図のB = 【7: 】 Jarmo である。年代はBC6500年。現在のイラク Iraq にあり、高原の多雨地帯である。20～25戸、人口150人と小規模。野生種に近いコムギ、オオムギ、豆類が出土した。適度な降水量が期待できる乾地で行うので【8: 】とも言う。ジャルモ遺跡は泥で埋まっていたから小さな川ならあったかもしれないが高原であり、大河とは無縁。ジャルモと同じ段階にあるいくつかの初期農村遺跡の発掘によって分かったことは、「農耕は大河のほとりで始まった」のではない。大河の水ではなく、降雨が頼りの【9: 】である。肥料を施さず、地力を消費し尽くす【10: 】だったため、定住して何年か同じ土地を耕作すると作物が実らなくなり、しかたなく新たな耕地を求めて移動する。村は放棄され、いったん廃墟と化すが、数十年か数百年後に人々は戻ってきて、前と同じ場所に村を再建する。この繰り返しで、層を成した小高い丘の様な遺跡（遺丘）を残す。これを「テル」あるいは「テペ」という。食料生産の安定・向上、大規模化のためには、**灌漑農耕**への移行が課題であった。

- 5) 「肥沃な三日月地帯」とは1916年、アメリカの考古学者【11: 】が初めて使用して以来、多くの学者によって古代オリエントの中心地を指す用語として用いられた。その範囲は野生のコムギ、オオムギが農耕・牧畜開始当時自生した地域（右図の縦線部分）より広く、エジプトまで含む半月型である。古代オリエント史の文脈において多用される歴史地理的な概念で、周囲の砂漠地帯とは対照的に大河川の恵みで農耕に基づく古代文明が成立した土地という意味で使われる。《人類が農耕・牧畜を開始したのは「肥沃な三日月地帯」である》という表現は誤りではないが違和感がある。



- 6) 農耕・牧畜は西アジアから、西は地中海沿岸、バルカン半島を経てヨーロッパ中部に、東はインダス川流域や中央アジア、中国北部に伝播したと思われる。BC5000年ごろ、ヨーロッパで麦の栽培や家畜の飼育がはじまった。スカンディナヴィア半島等バルト海沿岸やシベリアの森林地帯では、磨製石器への移行は行われたが、農耕・牧畜は始まらなかった。最古の穀物農耕は西アジアであり、農耕・牧畜伝播の発信源の1つは明らかにここであるが、**西アジアだけで始められて全地球に広まったのではなく農耕・牧畜の起源は多元的で、世界のいくつかの地域で始まり、しだいにその周辺に広まった!**
- 7) 初期の農耕では、ざっぱくに言って収穫量は播種量（はしゅりょう）のわずか3倍程度（現代では30倍、50倍は当たり前）に過ぎず、これが6倍程度になるのは、ヨーロッパでは十字軍が終わる13世紀である。農耕を始めた当時の人類は、まさかこのような非能率・不確実な手段に依拠して将来の文明が築かれることになろうとは誰も想像しなかったに違いない。ともかく、人類は【12: 】から【13: 】への食料生産革命をなしとげた。

国家の誕生に関する原論的理解

- 1) 西アジアの初期農耕民は決して大河川のそばで農耕を始めなかった。そんなことをしようものなら、極端な乾燥と毎年の大洪水（または大氾濫 以下同様）で生命すら危ない。特にティグリス・ユーフラテス両河は典型的な**天井川**で大洪水を起こした。しかし、BC5千年ごろ、メソポタミア※の人々は南部の大河流域に進出し、BC3千年代の後半には大規模な灌漑農耕の段階に達したと考えられる。やや遅れてナイル川下流域も同様の段階に達した。※ギリシア語で「河の間の土地」
- ①大洪水から村や神殿を守る必要があり、必死に堤防を築いた。この事業を【14: 】という。堤防と言っても、最初はどうしても水没しては困るところだけを守るためのものだった。
 - ②極端な乾燥地域なので、乾期には川から水路を開き農業用水を配水する必要があった。この事業を【15: 】という。
 - ③洪水（または氾濫）を予測したり測量を毎年やり直したりするには、天文学や数学が不可欠。
 - ④毎年大洪水は【16: 】を施すことの替わりをした。大洪水（大氾濫）は植物を育てる養分を十分含んだ新しい土を上流から運んで堆積させたから、大洪水で一時的に水没し、水が引いた後の土地を畑にすれば肥料を与えることなく、同じ土地での連作が可能である。

- 2) 都市国家の成立 メソポタミアではBC3千年代のことである。治水、灌漑事業、大洪水後の耕地整備に始まり、種蒔きから収穫までの農作業等のすべては組織的計画的な集団労働によってのみ可能となる。加えて、木材、石材、鉱物資源、貴金属などは遠隔地から調達するほかなかったし、土壌塩化の心配もあった。これらのすべてを円滑に実行しないと西アジアの大河川下流域で灌漑農耕の豊かな恵みを楽しむことはできない。強力な統率力を持つ権力者が治水・灌漑事業を指揮し、他の集団との戦争を指揮することを誰も認めざるを得なかった。その統率者を仮に王と呼ぼう。王は大河の流域に城壁で囲まれた都市を造営した。王は、権威と強制力を持ち反対者を抑圧する武装した「実力行使部隊」を持つようになり、都市周辺の集落を支配下におさめた。これが人類最初の【17: 〃】(都市国家)である。灌漑農業への発展は国家の成立を促したと言える。その国家は必然的に王に権力が集中する【18: 〃】だった。
- 3) 農業生産力の増大で**余剰生産物**※が生じた。このことは社会をこう変えた。 ※ 生存に必要な量を超えて生産された物
- ①【19: 〃】の成立…それは最初は食料(食糧)そのものだった! 「金持ち」ではなく、いわば「穀物持ち」青銅や鉄、そして貴金属に置き換えられて価値が保存されるようになる。神官や戦士など「権力者とその周辺の人々」と、彼らに支配される一般民衆の間に貧富の差が生じた。すなわち【20: 〃】の成立である。こうして、王族・貴族・神官・戦士(「エライ順」はこの通りとは限らない)・自由民・半自由民・奴隷と言った身分秩序が成立し、人類は初めて**搾取のある不平等で敵対的な社会**を形成した。それ以前のいわば平等な社会を原始共産制と呼ぶこともあるが割愛する。
- ②意外にも【21: 〃】という身分はこの時期に成立した。奴隷とは、労働の成果である余剰生産物のすべてを取り上げられ、「エサ」として食事を支給される人間家畜のことである。余剰生産物が生じない段階では、例えば戦争捕虜を強制的に働かせても、彼らに生存に必要な食物を与えるなら、ほぼ無意味。「隷」の漢字は誤字多し!
- ③食料生産以外の様々な専門職が成立し、【22: 〃】※が成立した。道具を作るスキルは飛躍的に進歩し、美しい彩文土器や銅・青銅などの金属器も製作された。ただし、鉄はまだだ。 ※ 原始社会では自然的分業
- ④王や神官の記録の必要から、また余剰生産物を交易する商人の必要から、文字が成立した。人類史は、「**先史時代**」(文字による記録がない時代)から【23: 〃】に移行した。
- 4) 少なくとも受験的には「文明の成立」=「**古代国家の成立**」と考えてよい。メソポタミア南部が最古。やや遅れてナイル川流域。次にインダス川、黄河流域でも同様の段階に達し、遅れてアメリカ大陸でも国家が成立した。文化と文明の定義については『世界史用語集』(山川出版社2014年版)p3に興味深い記事がある。

遊牧も同時期に成立した

- 1) 人口の増加に伴い、農耕はもちろん普通の牧畜もできない土地に挑んだ勇氣ある人々は遊牧民の先祖となった。彼らは人類史上、最も早く、BC4000年頃ウマを、BC3000年頃ラクダを家畜化して、驚くべき機動力を発揮。年に数千キロも移動する遊牧民は人類初の国際交易の担い手となった。
- 2) 馬が引く「荷車」を起源とする「戦車」に乗る段階を経て、馬体に乗る(騎乗)スキルの発明は遅くともBC9世紀で、騎馬兵の登場は重大な軍事的意味をもつ。騎馬遊牧民はBC6世紀~BC4世紀、南ロシアに初の遊牧帝国、スキタイを形成した。農耕に直接依拠しないが、もちろんこれも国家である。

農耕・牧畜の起源は多元的

- 1) 農耕・牧畜は、世界のいくつかの地域で始まり、しだいにその周辺に広まった! 出題例は少ないが、下線部は既出。
- BC6000年ごろ 南アジアでムギ類の栽培、東アジアでブタの飼育がはじまる。
黄河流域でアワやキビの栽培、長江流域でイネの栽培がはじまる。
- BC5000年ごろ 東アジアで、アワ、イネの栽培、ブタ、犬(食用)の飼育がはじまる。
東南アジアでタロイモの栽培とブタの飼育がはじまる。
アメリカ大陸でカボチャ、トウモロコシの栽培、リヤマの飼育がはじまる。
- BC4000年ごろ サハラ砂漠周辺でキビの栽培、ウシ、ヒツジの飼育がはじまる。
黄河流域で彩文土器(彩陶)が作られた。←西アジアの影響
- BC2500年ごろ 東南アジアで磨製石器がつくられる。その頃既にイモ類、バナナ類を栽培していた。
東南アジアのバナナこそが人類最古の栽培作物であるとする説もある。
イモ類、バナナ類の栽培が古代文明を生み出さなかったのはなぜだろう?
- 2) 農耕の開始とともに、以前からあった土器が更に発達した。用途は食料の貯蔵と調理である。西アジアでは、赤・黒・白などの顔料で素朴な文様を描いた【24: 〃】(類出)が創られた。これと似た製法・デザインの土器が世界各地で発掘されるが、これが発掘された地域は何らかの形で西アジアの影響を受けていると見られる。

もはや「人種」は使わない

現生人類の学名: ホモ=サピエンス=サピエンス

- 1) 生物としての現生人類は一属一種である。全地球に広まると、環境適応の結果として皮膚の色、虹彩の色、頭髪の色などに多様な形質を持つに至った。これらの形質によって人類を「人種(race)」に分類する習慣が長く行われ、特に**皮膚の色**によってモンゴロイド(黄色人種)、コーカソイド(白色人種)、ネグロイド(黒色人種)等に分類したが、これらには何の科学性もなく、現代では「人種」という概念は研究者の間では全く支持されていない。
- 2) 19世紀後半には社会進化論(Social Darwinism)が生じ、人種差別・障がい者差別の正当化に使われた。
- 3) 言語、宗教、習慣などの文化的特徴で人類を**民族**という集団に分ける考えは今も行われている。

いわゆる語族とは?

言語も多元的で、世界の数カ所で別々に成立してそれぞれに広まった。

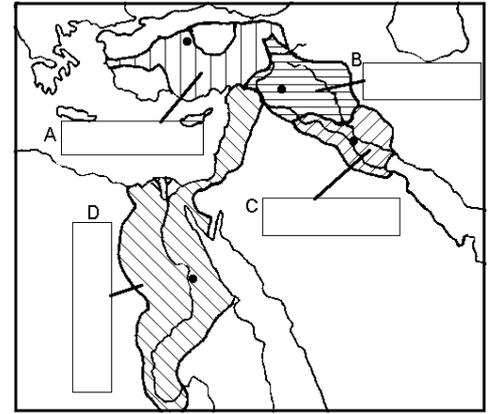
文法上の特徴などから、同一の祖語から派生したと思われる複数の言語のグループを語族と言う。教科書の表を必ず参照せよ。以下の最小限の知識を記憶せよ。同じ系統の言語を話す人間集団を「〇〇語系」と表現することがある。

- 1) **インド=ヨーロッパ語族**は、ゲルマン語派(英語、独語・)、イタリック語派(ラテン語、仏語・)、インド=イラン語派(サンスクリット語、ヒンディー語、ペルシア語・)等に細分される。
- 2) **アフロ=アジア語族**は、セム語派(アッカド語、ヘブライ語、アラビア語 08W・)、エジプト語派(古代エジプト語、コプト語)等に細分される。なお、アフロ=アジア語族>エジプト語派は、かつてセム・ハム語族>ハム語系と呼ばれた。この呼称は現在では使わない。しかし、「エジプト語が『【25: 〃】系』である」と、今も出題されることがある。
- 3) かつてアルタイ語族(トルコ語、満州語・)に分類されていた**韓国語、日本語**は、アルタイ語族に分類すべきかどうか、長年にわたる論争に結論は出ておらず、帰属不明となっている。

インド=ヨーロッパ語系の人々の侵入

大移動によりオリエントに侵入したインド=ヨーロッパ語系の人々は、ウマに引かせた戦車を用いるのが共通点で、強力な軍力でオリエント全域で覇を競った。(戦車はシュメール人も使った)

以下の1) 2) 3) はかつてすべてインド=ヨーロッパ語系の人々であったと教科書に書かれ、入試にも出題された。しかし、今日では2) 3) は本当にそうか疑問視されている。しかし、世界史テキストの伝統的な記述順に従いここに記載しておこう。

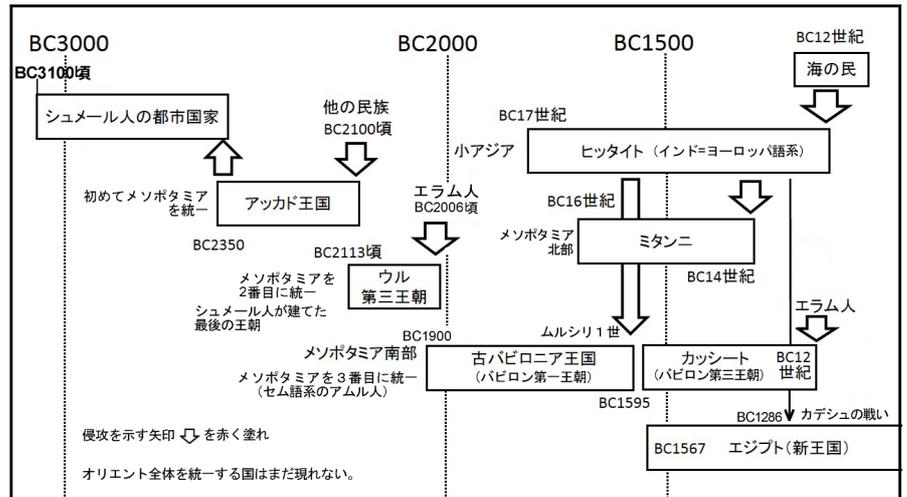


- 1) 【18: 】は、人類で最初に【19: 】を使用した。確かにインド=ヨーロッパ語系である。小アジア(=アナトリア Anatolia)が本拠地。征服したハッティ人が既に製鉄技術を持っていたと思われる※4。BC17世紀半ば、【20: (現ボアズキョイ)】Hattusha (Bogazkoy)に都を置き鉄製武器と馬が引く戦車を駆使してエジプト新王国と古代中近東世界を二分する大帝國となる。彼らは、**軍事遠征・商業活動を通じてオリエント各地域を結びつけた**。BC1595年頃、ムルシリ1世はバビロン第1王朝(古バビロニア王国)を滅ぼす。その後、ヒッタイトはBC1400年頃には鋼(はがね)を発明、国家機密とした。鋼鉄である。BC14世紀にはミタンニを破り、シリアに進出してエジプトと戦った(BC1286? カデシュの戦い、相手はエジプト新王国のラメス2世)。ウマの調教と6本のスポーク式車輪のついた2輪軽戦車と機動的戦術はミタンニから学んだとされる。BC1286年、エジプト新王国のラメス2世とシリアの【21: 】で決戦を行い、BC1269年、和約が成立。この和約は現存する最古の国家間の条約である。BC12世紀初め、「海の民」の侵入によって滅亡。これによって鉄器製造の技術が全オリエントに広まり、鉄器時代に突入した。

※4 ヒッタイト人が征服したハッティ人が既に製鉄技術を持っていた。09.3.26「朝日」は、BC2100~BC1950の地層から製鉄の遺跡が発見され、「ヒッタイト起源説覆す」と報じたが、鉄器がヒッタイト起源だという学説はもともと存在しない。

- 2) 【22: 】 首都はワシュカンニ(テル=エル=ファハリヤ遺跡か?)。BC16世紀にメソポタミア北部からシリアを制圧。支配階級はインド=ヨーロッパ語系だが、住民の大部分は民族系統不明の【23: 】Hurrians(アムル人ではない)。支配階級もフルリ人だったという説もある。これに従えば全くインド=ヨーロッパ語系ではない。BC14世紀にヒッタイトに敗れて衰退。後にアッシリアに併合された。
- 3) 【24: 】 **ザグロス山中からバビロニアに侵入、バビロン第3王朝**として古バビロニア王国に替わってメソポタミア南部を支配。首都はバビロン。インド=ヨーロッパ語系と言われて来たが今日では民族系統不明とされる。メソポタミア南部を400年間支配。エジプト、ヒッタイト、ミタンニと抗争した。BC12世紀、**エラム人**に滅ぼされた。バビロン陥落の際、エラム人はマルドゥク Marduk 神像(バビロンの都市神だったが最高神になっていた)を略奪、ハンムラビ法典の石碑をスサへ持ち帰った。この石碑が1901年、スサで発掘された。なお、エラム人はBC21世紀にウル第3王朝も滅ぼしている。

- 4) 古バビロニア王国の滅亡以降、人類は前掲3王国とエジプト新王国とが織りなす本格的な国際社会を初めて経験。戦乱と外交交渉がくり返され、膨大な外交文書が粘土板に刻まれた。その一部がアマルナ出土のアマルナ文書 Amarna letters である。アマルナ文書で国際関係を研究できるBC14世紀前半から中葉にかけての時代を「**アマルナ時代 Amarna Period**」と呼ぶ(狭義ではアマルナに都があった20年間)。BC12世紀のヒッタイト滅亡で緊張が緩み、オリエント世界に鉄製武器が広まり、状況は大きく変わる。

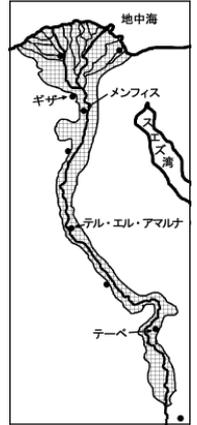


古代メソポタミアの文化

- 1) 宗教は多神教。有力な神は支配民族が交替するごとに変遷した。
- 2) シュメール人は神殿の事務や商取引の必要から、BC3000年頃、【25: 】Cuneiform script ※5を発明、粘土板に記録した。契約には【26: 】Cylinder sealを使用した。
- 《楔形文字の「楔」cuneus とは?》 細い棒を粘土板に突き立て引いて抜いたので、一筆が楔の形になる。楔とは木造建築において柱に梁を通した隙間などに打ち込むテーパー状の木片。楔形の読みは「きつけい」/「くさびがた」
- ※5 シュメール文字とも言う。BC3000年頃シュメール人が絵文字(象形文字)から発明。当初は表意文字だったが、表音文字となり、BC4世紀のアケメネス朝ペルシアの滅亡まで、全オリエントのいろいろな言語を記述するのに使われた。ペルシア文字もその一種。言語で共通語的に使われたのはアッカド語。ハンムラビ法典(言語はアッカド語)は石柱に書き写され楔形文字の基本とされた。その後、アラム文字とアラム語が広く使われた。
- 《学者の名前も重要》ペルセポリス碑文(ペルシア語)の研究で楔形文字解読のきっかけを作ったのは高校の校長、グローテフェント(独1775-1853 Georg Friedrich Grotefend)。ダレイオス1世の事績を記したベヒストゥーン碑文(ペルシア語、アラム語、アッカド語で岩壁に刻まれた碑文)を筆写、研究し楔形文字を解読したのは英軍少佐のローリンソン(英 1810-95 Henry Creswicke Rawlinson)。
- 3) 古代メソポタミアは、今日の文明の基礎をなす技術を開発した。天体観測(ただし目的は占星術)に基づく暦法(はじめは太陰暦、後に閏月を加えた太陰太陽暦)、六十進法、車軸よろろ。1週7日制もシュメール起源(バビロニアで確立)。

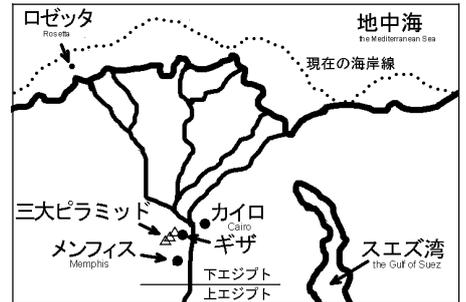
エジプト文明

この項の下線部分は、《頻出》である。



- 1) ヘロドトス (BC 5世紀ギリシアの歴史家) は「エジプトは【1: _____】の賜物(たまもの)」と言った。ナイル川は上流のサヴァナに降った雨水(雪融け水ではない)を集め、毎年7月中旬~10月、氾濫し、沃土(シルト)をもたらす。氾濫で年に一度水没する範囲(右図のメッシュの部分)が農耕可能な土地であり、肥料を施すことなく、連作が可能だった!
- 2) BC4000年ごろ、ノモス(県 エジプト語ではセパト)が上エジプト地域に22、下エジプト地域に20成立した。ノモスはエジプト人による独立集落であり灌漑農耕を行う単位だった。なお、エジプト人は語族ではアフロ=アジア語族のエジプト語派に属するが、かつてはセム・ハム語族の【2: _____】系と呼ばれ、今もこの表現で出題されることがある。
- 3) BC3500年ごろ上エジプト・下エジプトが成立、ノモスは行政単位に転化。
- 4) **初期王朝** BC3000年頃、上エジプト(ナイル中流域)を支配するファラオの【3: _____】Menesが下エジプトを征服、【4: _____】Memphisを建設して首都とし、統一国家を形成した。メソポタミアの初統一はBC24世紀だから、統一国家の形成という点ではメソポタミアより古い。多くのエジプト学者はメネスを第1王朝の初代ファラオであるナルメルと同一であると見なしている。王はこの段階からファラオ pharaoh と呼ばれた。 M08 これ以降末期王朝(第27~31王朝)、プトレマイオス朝(BC30年滅亡)まで続く。ファラオはもとは「大きな家」の意味。

- 5) **古王国** BC27~BC22世紀、第3~第6王朝。都は初期王朝と同じくメンフィス。主神は太陽神ラー Ra(もともとは下エジプトの神)。王は初期王朝時代から【5: _____】pharaoh と呼ばれ、ラーの子とされた。ファラオは【6: _____】を行った。天体観測・土木建築・測地などの技術が高度に発達。



- ①【7: _____】pyramid が建設されたのは**古王国時代に限られる!**特に第3、第4王朝期。ただし、「王墓ではない」説も有力化しつつある。第5王朝以降小型化して建造されなくなった。ギザの【8: _____】Khufu王のものは最大である! 《頻出》 現在、残念ながら頂点部がやや欠けている。

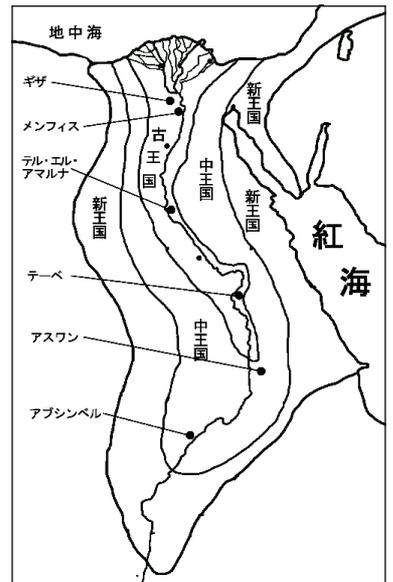
BC27世紀第4王朝期に建造。現在の高さは約137m、底辺の1辺は約230m、斜辺は約180m、材は全て石。総重量 約580万t、建設には10万人が20年を要したとされる。
メキシコのテオティワカン遺跡の「太陽のピラミッド」は高さ65m、底辺222m×225m
大阪の大仙陵古墳(仁徳天皇陵)は前方後円墳で全長486m、高さ35m。

ギザ(あるいはギーザ) Giza は、現在のカイロの対岸にある都市。その近郊に3大ピラミッドとスフィンクスがある。ギザはメンフィスよりやや下流にある。《これは本当に出題された》 上流からメンカウラー王の、カフラー王の、クフ王の

- ②ピラミッドを作ったのは民衆の労働である。彼らが奴隷だったかどうか論争になったことがある。「住民の大部分は、生産物への租税と無償労働が課せられる不自由な身分の農民であった」(『詳説世界史』山川出版社2015年版) 農耕のできない氾濫期に農民に仕事と食事を与える社会事業だったという説もある。古代ギリシア・ローマの奴隷や19世紀前半のアメリカ合衆国の黒人奴隷のような意味での奴隷ではなかったことは以前から分かっていた。氾濫期に村ぐるみで強制的に動員され、食料・飲料は支給された。

- 6) **中王国** BC21世紀~BC18世紀、第11~12王朝。都は中流域の【9: _____】Thebesに移る。中央集権化が進められ、デルタ地帯の開発が進められた。

テーベの守護神【10: _____】Amon(ないしはアメン)が主神となり、しだいに太陽神ラーと一体化しアモン(アメン)=ラーとなるが、中王国では一般化しなかった。**中王国までは鉄器を持っていない。**BC1674年頃、アジア系遊牧民で馬と戦車を駆使する【11: _____】Hyksosの進入を受け、約1世紀に渡って占領され中王国は滅亡した。占領される前から中央集権は崩れ弱体化していた。侵入時のヒクソスは鉄製の武器を持っていない。ヒッタイトとの混同に注意。第13~17王朝はヒクソス人王朝。



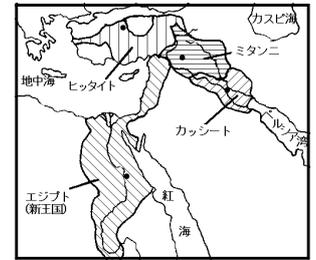
- 7) **新王国** BC1567年~BC1085年、第18~20王朝。都は主にテーベ。メンフィスの時期もあった。第18王朝はヒクソスを追放して独立を回復、シリア・パレスチナ方面にも遠征。中王国時代に一体化したアモン=ラーはこの新王国時代に広く信仰された。アモンとアメンは同じだが、後述のアトンとは異なる。

- ①最盛期はBC15世紀前半の【12: _____】(位BC1504-BC1450 Thutmose III)時代。彼はシリア、ヌビア(エジプト南部~スーダン)などに大規模な軍事遠征を行い最大版図を記録、「エジプトのナポレオン」と呼ばれる。

- ②BC14世紀半ばの第18王朝【13: _____】(位BC1379?-BC1362? Amenhotep IV)の改革は重要。彼は政治改革や唯一神【14: _____】Aton 信仰を強制する宗教改革を断行。BC1346年、自ら「イクナートン」(「アトンに愛される者」と改名。同年、何もない土地に【15: _____】Tell el Amarnaの建設を開始、まだ工事中のBC1343年、テーベから都を遷した。都としてほぼ完成したのはBC1341年頃である。遷都の理由はアモン=ラーを信奉する神官たちの政治介入を排除するためとされる。この地に都があったのは約20年間。この呼称は後世のもので、同時代の呼称はアケト=アトン(「アトン神の地平線」の意味)。なお、現地にはテル(遺丘)はなく、正しくはエル=アマルナないしはアル=アマルナと呼ぶべきである。アトンとアテンは同一。

この時期に、彼の力を反映した伝統にとらわれない清新な芸術、エジプトにしては珍しい写実的芸術洋式が栄えた。

これを**アマルナ美術**という。「王妃ネフェルティティ」(胸像)の写真参照。
古バビロニア王国の滅亡(BC1600年ごろ)以降、ヒッタイト、ミタンニ、カッシート、エジプト(新王国)の4王国が抗争した。テル=エル=アマルナの遺跡からBC14世紀の外交関係を記録した約400枚の粘土板文書(**アマルナ文書** Amarna letters)が19世紀末に発掘され、人類史上最初の国際社会が形成されたことが証明された。4王国抗争の混乱期のうち、アマルナ文書で研究できるBC14世紀前半から中葉にかけての時代を、エジプト新王国アメンホテプ4世の治世期を含むことから、**アマルナ時代**と呼ぶことがある。《頻出》



- ③アメンホテプ4世の死後、その女婿で後継者たる【16: (位BC1333?-BC 1324? Tutankhamun) は宗教の中心をテーベに(首都はメンフィスに)戻し、アモン=ラー信仰を復活させ、テル=エル=アマルナも破壊した!彼の墓はテーベの対岸「王家の谷」の地下にあり、1922年、考古学者カーターにより発見された。その墓は奇跡的にほぼ未盗掘で約3000年の歳月を超え、王のミイラは「黄金のマスク」をつけたまま20世紀の世界に姿を現した。発掘の資金提供者が墓の公開直後に急死するなど、発掘関係者が次々と不遇の死を遂げ、「ファラオの呪い」と囁かれた。

- ④第19王朝の【17: (在位年代は著しく異説あり Ramesses II) の治世に新王国は再び繁栄、BC1286年、ヒッタイトとカデシュで決戦を行い、BC1269年、ヒッタイトとの間で**現存する最古の条約**を締結した。BC1250ごろにヘブライ人のいわゆる「**出エジプト**」があった(それ自体は史実)が、その時のファラオもラメス2世と推定される。また、彼はBC1250年ごろエジプトの最南部に【18: (位BC1250?) を建設した。その後、新王国は鉄資源の不足等で衰退した。なお、ラメス2世、ラメセス2世、ラムセス2世は同一のファラオである。この13世紀末から「海の民」の侵攻が始まる。第20王朝のラメス3世は「海の民」を撃退して「最後の偉大な王」とされるが、その後も侵攻は続きエジプトは消耗した。新王国はここまで。第21王朝~第26王朝を第3中間期とし、末期王朝に含めない区分法もある。

アブシンベル神殿は1971年完成のアスワン・ハイ・ダムによってできるナセル湖(琵琶湖の7倍の人造湖)に水没するので、ユネスコを中心に世界中からカンパを集めて約60m上に移設された。これを契機に「世界遺産」の制度が作られた。ラメス2世のミイラは1881年に発見され、現在カイロのエジプト考古学博物館所蔵。20世紀、劣化防止措置のため仏に運ばれた際、フランスでは儀仗兵が捧げ銃を行って元首を迎える儀礼で迎え、特別発行のパスポート(?)の職業欄には「ファラオ」と記入されていたという。

- 8) **末期王朝** 第21~31王朝。衰退著しく、第25王朝はスーダンに成立したクシュ王国である。彼らはその後、アッシリアに追われ上流部に撤退、メロエ王国となる。詳しくはNo.52を参照せよ。第26王朝はアッシリアに支配され、BC525年にはアケメネス朝のカンピュセス2世に支配された。

エジプトの文化 この項の下線部分は、《頻出》である。

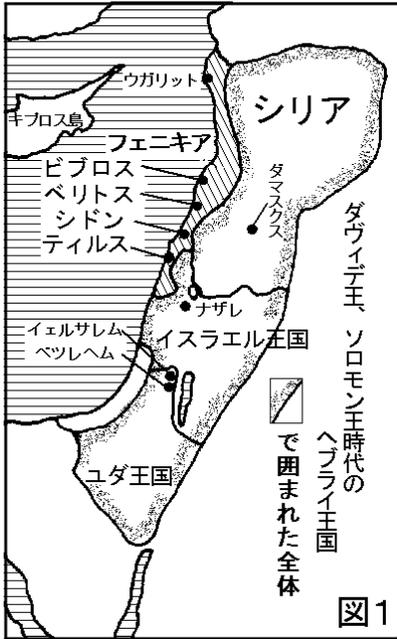
- 1) 宗教は多神教 最高神については既に述べた。数多くの動物神も信仰され、**多神教**。彼らは「来世」を信じ、遺体を**ミイラ**にした。墓には、①死後の生活に必要な品物、②死後の審判に備える【19: (位BC1400?) の】を副葬した。「死者の書」はパピルスに死後の世界を支配する【20: (位BC1400?) の】の審判を通過できるよう様々な絵や呪文が書かれている。犬の頭のアヌビス神が死者の心臓と「真理の羽根」を秤(はかり)にかけ、秤が傾けば心臓はアメイトという怪物に食われ死者は再生できない。なお、メソポタミアではミイラを作らない。
- 2) 文字は【21: (位BC1400?)】であり、【22: (位BC1400?)】(ヒエログリフ)と最も簡略化された【23: (位BC1400?)】(デモティック)がよく知られている。このほかに神聖文字を簡略化した神官文字(ヒエラティック)もあった。1799年、ナポレオンのエジプト遠征の際にロゼッタで発見された「**ロゼッタストーン**」は**上から順にヒエログリフ、デモティック、ギリシア文字**の3種類の文字で、プトレマイオス朝のプトレマイオス5世(位BC204-BC181)の業績 K01について同じ内容を記録している。1822年、**フランス人のシャンポリオン Champollion が解読に成功した。《頻出》**
- 3) 文字は**パピルス papyrus**に記し、金石にも刻んだ。パピルスとはナイル流域の湿地帯に繁茂したカヤツリ草の一種であるが、それを材料に作られる筆記媒体の名称でもあり、paperの語源。地上茎の皮を除去し内部組織(髓)を縦に削いで細長い薄片を無数に作りシート上に組み合わせ、若干腐敗させてから繊細に叩いて作る。後漢の蔡倫が改良した紙との最大の相違は、一度繊維を水に溶かして分散させ、人為的に絡み合わせて膠着させる工程を経ないこと。こういう物を紙と定義するならパピルスは紙とは言えない。現代ではエジプトの観光土産と化している。
- 4) ナイル川の氾濫の後、水の引いた氾濫原は一切の目印が消滅、流路さえ変わり、測量のやり直しが必要だった。耕地を区画しなおすために、【24: (位BC1400?)】が発達。後にギリシアの幾何学の基になる。また氾濫予測のためにも正確な暦が必要で、1年=365日の太陽暦ができた。これがローマに伝えられ【25: (位BC1400?)】となり、更にグレゴリウス暦(16世紀)を経て今日の暦となった。水位を観測する設備はナイロメータと言う。実用性のある学識を追究する傾向があり、医学、天文学、数学などが発達。青銅の鑄造は発達したが、中王国までは【26: (位BC1400?)】を知らなかった。



「海の民」の来襲 BC13世紀末~BC12世紀初め

- 1) 民族系統不明の「海の民」と総称される人々が東地中海一帯の諸国家・諸都市を攻撃し、大混乱を引き起こした。図の矢印は「海の民」来襲。彼らの猛烈な攻撃によって、次のような事態が起きた。
 - ①【27: (位BC1300?)】は攻撃により**滅亡**した。BC12世紀初めである。
 - ②【28: (位BC1300?)】は滅亡はしなかったがダメージは甚大で、弱体化した。
 - ③ **ミケーネ文明**を滅亡させたという説もある。
- 2) 特にヒッタイトの滅亡は重要である。その結果、次のような事態が起きた。
 - ①ヒッタイトが独占していた【29: (位BC1300?)】がオリエントに広く普及。オリエントは鉄器時代に突入した。
 - ②ヒッタイトとエジプトの間の緊張関係がなくなり、商業が活発化。【30: (位BC1300?) 人、(位BC1300?) 人、(位BC1300?) 人】の活動が活発化した。これらの3民族に共通することは次の3点。(i) 語族ではアフロ=アジア語族の【31: (位BC1300?)】である。かつては、セム・ハム語族の**セム語系**と呼んだ。今でもこの表現で出題されることがある。(ii) 交易を生業とする商業民族である。(iii) 文字をつくった民族である。フェニキア文字はきわめて重要である。





フェニキア人とアラム人

左図の領域は、シリア・パレスチナ地方である。エジプトとメソポタミアを結ぶ通路である。シリア地方は現在のシリア・レバノン両国にあたる。パレスチナ地方の古名はカナーン。先住民族はセム語系（厳密にはセム語派）のカナーン人。彼らはBC1500年ごろから交易を行って栄えた。パレスチナの名は、その沿岸部に定住した「海の民」の一派ペリシテ人に由来する。パレスティナとも表記する。BC12世紀初めのヒッタイトの滅亡、エジプトの弱体化により、軍事的緊張状態から解放されたこの地域で、三つの民族が活性化し、重要な役割を演じた。

- 1) 【1: Phoenicians セム語派】
 以下の港市国家を建設して拠点とした。左図で位置を確認せよ。北から順にウガリット(ウガリト) Ugaritは最古の港市。07A A=青山学院 【2: Byblos】はエジプト産パピルスのギリシアへの積み出し港。【3: Tyros】は現在のベイルート、その南のシドン Sidon、カルタゴの母市となる【4: Tyros】など。レバノン杉は造船・建築材として超人気商品。BC3000年紀から森林破壊が進み今はほとんど自生せず、レバノン共和国の国旗の中央に緑のシルエットで描かれている。フェニキア人はBC12世紀ごろから、東地中海の商業交易を活発に行い、西地中海にも進出、クレタ・ミケーネ文明が衰えた後をうけて地中海貿易をほぼ独占した※。アケメネス朝ペルシアの保護を受け、その海軍の主力となった。北アフリカからイベリア半島にかけて多くの植民都市を建設し、中でも母市ティルスから宗教上の理由で移住したとされるカルタゴ Carthago の発展はめざましかった。

※ ヘロドトス (BC 5 世紀、ギリシアの歴史家) はフェニキア人が航海術に優れていたと記述している。

☆フェニキア人は、交易活動に不可欠の記録のために、先住のカナーン人がヒエログリフから創り出した最古の表音文字であるカナーン文字(シナイ文字はその一種)に改良を加え、BC13~BC12世紀ごろに線状の【5: Phoenician alphabet】を作った! 母音文字がなく、22文字の子音文字からなる表音文字である。これが後のアルファベットの原型。BC 8 世紀に、キプロス経由でこれを学んだ【6: Aramaean alphabet】人が、母音文字を加えるという重要な改良を加えた。これがαβγ…の【7: Aramaean alphabet】

【8: Aramaean alphabet】 Aramaeans (シリア人とは言わない) BC1200年ごろから、セム語派遊牧民のアラム人が、シリアに多くの都市国家を築いた。アラム人は、【9: Damascus】 Damascus を拠点に、広域にわたる陸上通商活動を行った。アッシリア、アケメネス朝ペルシアからも商業を保護され、ロバやラクダに商品を積んで隊商(キャラバン)を組みイラン高原から中央アジアにまで達した。このため、アラム語は国際商業の共通語※として西アジア一帯で用いられた。彼らは、フェニキア文字をもとに、独自のアラム文字をつくった。アラム文字は、西アジアのアラビア文字、ヘブライ文字の原型になったばかりか、中央アジアのソグド文字(→ウイグル文字→モンゴル文字→満州文字)、突厥文字(ソグド文字からも間接的影響)の成立にも影響を与えた《頻出》。ソグド文字は古代インドのブラフミー文字(→チベット文字)にも影響を与えた。 ※後のイエスもアラム語を話したとされてきたが、近年、ヘブライ語、ギリシア語説も有力である。

ヘブライ人(セム語派遊牧民) 『旧約聖書』の人々。バビロン捕囚から帰還以降は「ユダヤ人」と呼ばれる。

- 1) 「出エジプト」 ユーフラテス川上流域の遊牧民だったヘブライ人 Hebrews は、BC1500年ごろから【10: Canaanites】に定着した。ある時、飢饉を逃れるため、ヘブライ人は大挙して【11: Egypt】に移住した(時期不明)。エジプト新王国の酷使に耐えかねて、BC1230年ごろ【12: Moses】を指導者としてエジプトを脱出。シナイ半島を経て、パレスチナ東方の荒野を長らく放浪した後、パレスチナに入った。以上は、『旧約聖書』の「出エジプト記」の要点であるが、基本的には史実であり、モーセも実在した(学会通説)。ただし、「紅海を渡るとき、神の息吹で海水が吹き分けられて海底が露出した」とか「シナイ山で、モーセは神に会い「十戒」(じっかい)を記した石板を授けられた」という記述を信じるか否かは個人の信仰の自由に属する。

「十戒」(1957年、パラマウント映画)は巨費を投じたスペクタクル映画。モーセをチャールトン=ヘストン、ラムセス2世をユル=ブリナーが演じている。海水が吹き分けられるシーンは圧巻。この「十戒」を記した石板の破片を納めた棺を「アーク」(聖櫃)という。「レイダース・失われたアーク(1981年、パラマウント)」はナチがこれを考古学者に探させるという荒唐無稽な娯楽映画。ジョーンズ博士の制止も聞かずナチが棺を開けると…。主演ハリソン=フォード。インディー・ジョーンズはシリーズ化された。

- 2) 「ソロモンの栄華」 『新約聖書』にも例として登場…「しかし、あなた方に言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」(マタイによる福音書6章29節)
 BC11世紀 ヘブライ人は、初代国王【13: Saul】 Saul が即位して、エルサレムを中心にイスラエル王国(ヘブライ王国とも言う)を建てた(部族連合が発展したもの)。 2011,07J, 2011埼玉 J=上智
 第2代国王、【14: David】 David とその子、第3代国王、【15: Solomon】 Solomon のとき (BC10世紀)、全盛期を迎えた。これが、いわゆる「ソロモンの栄華」である。ソロモン王はエルサレムにヤハウェ神殿(ソロモン神殿)を建てた 08W とされている。ところが、ソロモン王の死後、イスラエル王国は、北部のイスラエル王国(北イスラエル王国)と南部のユダ王国に分裂、抗争し、滅亡への道をたどった。イスラエル王国は、BC722年、アッシリアの【16: Assyria】

【17: Babylon】により滅ぼされ、住民の多くがバビロンに連行され、約半世紀帰国できなかつた。これを【18: Babylonian Captivity】という。彼らは、BC538年、新バビロニア王国を滅ぼしたアケメネス朝のキュロス2世によって帰国を許されると、神殿を再建しユダヤ教を確立した。このころ『旧約聖書』が編纂された。このバビロン捕囚の時代にゾロアスター教から影響を受け、最後の審判、天使と悪魔などを取り入れた。これらは後のキリスト教、イスラーム教にも大きな影響を与えた。 11J, 02W

